サツキは闘病の友

石谷町・久木崎さん「花の魅力救い」

鹿児島市石谷町でサツキ専門園芸店「ナスカさつき園」を営む久木崎猛さん(66)は、手足に力が入らなくなるギラン・バレー症候群と闘っている。花の美しさを救いに、苦しい療養生活も乗り切ってきた。6月10日まで「さつき祭り」を開くのに合わせ、自らと同じく療養中の人に苗木を贈りたいと、大事に育ててくれる人を募集中だ。

「自分が魅了されたサツキの美しさが、誰かの癒やしになればうれしい」と話す久木崎猛さん。手元にあるのが贈呈用の苗木＝鹿児島市石谷町

苗木贈呈先を募集

ギラン・バレー症候群は10万人当たり年1～2人が発症し、重くなるとまひなどの障害が残ることがある。久木崎さんは、化粧品会社の宮崎市の事業所に勤務していた2000年に発症。自宅があった故郷鹿児島に帰り、治療を始めた。他の病気の併発もあり、7カ所の病院で計2年8カ月を過ごした。

退院後、自宅療養の車いす生活となり、会社も辞め、引きこもりがちに。趣味だったサツキの手入れを本格化しようと一念発起して05年に会社を設立し翌年、園を開いた。「サツキの魅力は花の色の鮮やかさ。毎日毎日水やりして1年かけて咲かせるのも醍醐味」

現在は3人の従業員と共に、5千本以上に上る鉢植えや苗木の手入れ、来客応対に忙しい日々を過ごす。「サツキがなければ外出することも少なく、話し相手となる愛好家仲間もできず、寂しい暮らしをしていたかも」。一方、他の病気も含めて手術が続き、体力的な懸念が増していることから「大事にしてくれる人に事業を譲りたい」と後継者も探している。

ナスカさつき園＝099(278)5412。

（小手川美子）

編集局日誌

2018・6・4

一日一日

報道部・小手川美子

「病気になってすぐは死ぬことばかり考える。手術や治療が落ち着くと、『なぜ私がこんな目に遭うのか』と疑問を持つ」。患った者だからこそ通じ合う「心の動き」がある。

鹿児島市石谷町で「ナスカさつき園」を営む久木崎猛さん(67)が語った。手足などがまひするギラン・バレー症候群を18年前に発症。病と付き合いながら起業し、サツキの手入れに忙しい毎日を送る。6月初旬まで同園で開催中の「さつき祭り」の間、自分のように療養中の人に苗木を贈っている。花の美しさが慰めになれば、との願いからだ。

5月は大病や障害を抱える人が大勢訪れた。がん患者の女性からは「元気をもらいました」と言われ、互いに涙をこらえるのに必死だったという。「頑張れと言われることもあるけど、頑張る必要はありませんよ」と女性に話したのは、実感に基づく。自らを奮い立たせることは、ときに心身への負担を伴う。「一日一日を大切に生きるだけで十分ではないですか」と伝えたそうだ。

「サツキに向かい合うときは、これから先への不安も消えていく」。開花を楽しみに手入れをするひとときが、日々を支えている。

バラが見頃を迎え来園者でにぎわう錦江湾公園　＝1日、鹿児島市平川町